

習慣の問題をめぐる

パスカルとモンテーニュ

三宅 中子

はじめに

習慣論への関心から出発してパスカルの思想を追って行くと、習慣論の問題が実に様々の角度から考えられていることに気がつく。パスカルにおける習慣の扱い方の一つ一つの面は、夫々同時代の、あるいは古代ギリシヤ以来の多くの思想家と深いつながりを持っている。パスカルの『パンセ』の中に断片として記されているために、その習慣論は、パスカルが影響を受けていると思われる幾つかの原典を検討することによって、補いをつけねば、理解が困難である。又逆にいえばパスカルはそれら哲学者達のすぐれた注釈者にもなり得ている。このことはモンテーニュとの関係においてとくにいちぢるしい。

さて、以前本年報第十六輯の小論「パスカルにおける自然と習慣について」^(註1)において先ずパスカルの習慣論をその自然観との関係でかなり網羅的に分析した。ついで十八輯ではパスカルの習慣についての考え方のうち非常にユニークであると思われる^(註2)、ブランシュヴィック版の断章九三「自然は第一の習慣である」という部分をとり出して

ドイッチェ・ロマンティックの思想家ノヴァーリスのある断片と比較した。

本稿ではむしろ本年報十六輯掲載の論文の内容を主として前提として、『パンセ』の断片九三がパスカルの習慣論の中核となっていること、そしてこの断片には自然の確実な認識についての懐疑が盛り込まれていることを改めて想い起こし、ここにはモンテーニュの習慣論及び懐疑論がかかわっていることを、モンテーニュの思想の発展の中であらえてみようと思う。

註

- (1) 学習院研究年報第16輯(昭和四十四年度)掲載拙稿「パスカルにおける自然と習慣について」
- (2) 同年報第18輯(昭和四十六年度)掲載拙稿「ノヴァーリスの自然観における習慣の意味」
- (3) Blaise Pascal: Pensées et opuscules par M. Léon Brunschvicg 18 édition, Hachette を使用。
なお本稿ではこれに加えて次のテキストをも参考にした。
Pascal OEuvres complètes par Jacques Chevalier, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1954.
なお、『パンセ』及びその他のパスカルの小論の日本語訳には、中央公論社刊「世界の名著」パスカル『パンセ・小品集』(前田陽一編)を参考にした。
- (4) モンテーニュのテキストは文として次を使用した。
Montaigne OEuvres complètes par Albert Thibaudet et Maurice Rat, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1962.

また、日本語訳には、新潮文庫、関根秀雄訳『随想録』(一)～(六)を参考にした。

第一章 パスカルの理解したモンテーニュ

第一節 パスカルにおける懐疑

フランシシュヴェイック版の『パンセ』の断章八九一九七及びその前後にあつめられたパスカルの習慣についての断

片は、習慣が認識論上決定的な役割を果していることについて記している。断片九三をも含めてこれら一連の断章では習慣 (coutume) を「欺く力 (les puissances trompeuses)」のうちの一つとみなしている。「欺く力」というものは三つある。^(註1) 想像力 (imagination)、自己愛 (amour propre) とそして習慣である。これらは認識とか判断の背後にあって常に人間を誤謬とあいまいさに誘い込むのである。

ところで、「プロヴァンシアル」の第十八の手紙の中で、パスカルは理性 (raison) と感覚 (sens) と信仰 (foi) を我々の認識の三原理 (trois principes de nos connaissances) であるとしている。他方、さきの一連の諸断章の中では、個々にはあるが、習慣が感覚や理性をあざむき、信仰も慣れによって得る「恩寵」を与えられたことによって得た神の信仰は別である) ものであることをくり返しのべている。それら認識の諸原理は習慣によってすべてがあいまいに、不正確なものにされてしまうのである。そして断片八九、九一、九二などでは、数や空間の運動のような一見自明なものでさえ、ひいては自然の原理さえあやしくなってしまうことになるのである。更に断片九六では、「習慣が第二の自然であるように、自然が第一の習慣ではないかということを私は非常におそれる」と述べて、「自然が習慣である」という断定にまでつきすすむのである。ここには自然の確実な認識を得ることへの懐疑がにじみ出ている。

一六四八年に実験 (experience) を自然学の唯一の原理と信じて当時の通説にいどんで行われた真空の実験一つをとってみても、アリストテレスの自然学にもとづく中世的な自然観からはなれたところで育てられ、新しい時代の息吹きを吸ってさっそうと近世の機械論的自然観による数学、物理学の建設の舞台上に登場したパスカルを思うと、一六五七年、五八年、『パンセ』という形で後にまとめられた断章を書き記していった頃のパスカルは別人の観がある。

もっとも、真空の実験について一六五一年に発表した「真空論序文」^(註3)の中でも、パスカルは、「アリストテレスの『真空の嫌悪』というような考え方に信をおいて、永い間人々は疑うことなく真空を否定して来たが、自然について我々は如何に習慣的な通説に引きずられやすいか、自然はいつも我々の理解しているかぎりでの自然でしかないのであって、我々としては実験によって真理をめざして際限なく自然に一步一步近づいて行くしかない」という意味のことをいっている。

したがって「真空論序文」にもパスカル一流の習慣論が顔を出していることになるが、しかしここでは、人類の進歩を信じて、我々が自然をみる場合、習慣にくもらされてはならぬことの反省をもとめているのであって、その語り口は淡々としたものである。いうなればそれは、自分を真理という大海を前にして浜辺の小石とたわむれている小児に見立てたニュートンの謙虚さにも似た雰囲気のものである。

だが、『パンセ』の八七―九三の諸断片でいっていることはもっと本質的で深刻であるように思われる。パスカルがこのように人間の認識能力について突如、不可知論的、懐疑論的な舌鋒をあやつるにいたったことについて考えられるのは、やはりモンテーニュの『エッセー』の耽読、しかも『エッセー』中の白眉ともいべき「レイモン・スポンの弁護」とその前後の習慣についての項からの影響がかなりのものであったことである。

『パンセ』がモンテーニュのエッセーを下敷きにして書かれたことはよくいわれることで、本邦にも前田陽一氏^(註4)のくわしい研究がある。前田氏はその著書の中で、『パンセ』には『エッセー』から同じことがらが殆んど同じ表現のまま持ちこまれている場合も相当に多いことなどを厳密な対照表によって示されている。そのこともさることながら、「サンとの対話」の中でド・サンもいっているように、パスカルはモンテーニュをよく読みこなしているあまり、たくみにモンテーニュ自身が意図したより以上のものに仕立てあげてしまうのである。それはまさにある

意味で「藍より青く」なってしまうのであり、模写の方がすぐれてしまった名画の如きである。

ただし、パスカルの習慣についての考え方にかぎっていうと、その全部が全部モンテーニュの焼き直しというわけではない。習慣に自動性を結びつけて考えている。^(註。)断片二五二などはデカルトの人間機械論をイメージにしていると考えられ、したがってデカルトとの関係が問題になるところもある。パスカルは自然観に関しては、「ルネッサンス」末期の具現者ともいべきモンテーニュをそのまま容認するわけにはいかなかった。自然観に関してはパスカルはデカルトの機械論的な見方の追隨者である。だがしかし、デカルトにおいて自明たるべき理性がパスカルにおいて「よわい葦」によわめられる、ところにあづかっているのがモンテーニュである。

ところでパスカルはモンテーニュをいつよんだのであろうか。エピクテトスとモンテーニュについて論じた「サンとの対話」そのものが行なわれたのが一六五五年一月であるから、当然それ以前ということになる。^(註。)一六五四年十二月八日付けの妹ジャックリーヌ・パスカルから姉ジルベルト・ペリエ夫人にあてた手紙に、パスカルが、「もう一年以上前から」社交を嫌い、社交界に属するすべての人々をひどく嫌っている様子が記されており、更に一六五五年一月二十五日付けの手紙には、その手紙の日付けからみて一年前の九月、つまり一六五四年の九月に修道女ジャックリーヌをポール・ロワイヤールにしばしばたずね、パスカルが従事している仕事をひっくりかえす、すべてのこの世のものからはなれてしまいたい、自分は神から全く見すてられた状態にあり、神にひかれる気持も感じない旨告白したことが妹の手によって記されている。一六五四年九月といえば、例の十一月二十三日の決定的回心 (Seconde Conversion) の直前である。

さて左記の、二番目の手紙の中の「パスカルの従事していた仕事」といえば、主として物理学、数学上のものがあるが、それに限界を感じていたという個所をどう受取るべきか。ここには一人のジャンセニストとして人間の惨

めさを自覚する以上にもっと内面的に深い苦悩があったと思わないわけにはいかない。パスカルの社交生活は「真空論序文」を出した一六五一年のあとの一六五二年頃からはじまる。一六五二年四月にはエギヨン夫人のサロンで計算器と真空について話をし、一六五三年の夏にロアネーズ公と親しくなり、彼を通じてシュヴァリエ・ド・メレヤミトンと知り合う。十七世紀社交界の典型的 *honnête homme* (洗練された教養人) で、*Iberlin* (自由主義者) のシュヴァリエ・ド・メレによってパスカルはいわば「繊細の精神」を大いにはぐくまれたらしいが、モンテーニュはリベルタン達の間ではバイブルのようによく読まれたようであるからこの時期にモンテーニュ、シャロン、あわせてエピクテトスなどを読みふけることになったのであろう。そしてその年の一月から六月までは科学研究に没頭して数々の業績をあげているが、それ以来パスカルの「幾何学的精神」の従来のような働きはバッタリと止まってしまっている。パスカルは後に『サシとの対話』でるる述べたてているエピクテトスとモンテーニュの狭間で、あるいは「傲慢」になり、あるいは懐疑のふちをさまよいして、彼が最初の回心の時に「知った」神から暫時はなれることにもなっていたようである。『パンセ』の中でパスカルは告白する。

「私は生涯の長い間を一つの正義が存在すると信じて過ごして来た。そしてその点で私はまちがっていなかった。なぜなら神が我々に啓示しようとされたところに従って正義は存在するからである。だが私はそれをそのようにとつてはいなかった。そしてその点においてこそ私はまちがっていたのだ。なぜなら私はわれわれの正義が本質的に正しく、私はそれを知り、それを判断するものを持っていると信じていたからである。だが私はあまりたびたび正しい判断を欠いたので、ついに自分について、ついで他人について疑心をいだくようになった。私はすべての国々や人たちの変わるのをみた。そしてこのように真の正義についての判断をたくさん変えた後に、われわれの本性は絶間のない変化でしかないと私は知った。そしてそれ以来私は変わらなかった。そしてもしも変わったなら

ば、私は自分の意見を確かめることになるだろう (三七五)。

「神の認識なしに幸福はなく、神に近づくにつれて幸福になり、神から遠ざかるにつれて不幸になり……それゆえに、疑うということは不幸である。しかし疑いの中にいる場合に、必ず果たさなければならぬ義務は求めるということである。したがって疑いながらも求めないという人は、不幸であると同時に不正である (一九四の二)。

前の方の断片の「すべての国々や人達の変わるのを」パスカルにみせたのはモンテーニュであり、懐疑にとりつかれて神から遠ざかって「不幸」であったパスカルは求めずにはおれなかった。求めることは生きている以上当然そうせずにはおれぬ「義務」だと考えている。パスカルは「求め」た。そしてある夜突然神の恩寵の光の中にいることを感じて歓喜にひたり、神を信じ、人間の認識能力の限界、科学研究の空しさ(断片一四四)への悩みをも克服することが出来たのである。

したがってパスカルは認識論上の不可知論的懐疑的傾向をそっくりモンテーニュから受け継いだということではなく、パスカルのある時期からの内面の動きの中でモンテーニュと出会い、懐疑の雲にとりまかれたパスカルにはモンテーニュのそのような面が殊更に光ってみえたのだと受取るべきであらう。

註

(1) 想像力は「スボン」の中だけではなく、『エッセー』の至る所で問題になっている。又自己愛も例えば「スボン」の中でパスカルと同じように考えられている。(cf. *Piétade Essais*, p. 513.)

ただパスカルは想像力と習慣を結びつけて一種の「観念連合」のようなことを考えた。(学習院年報16輯拙稿一四ページ参照)。

(2) cf. *Piétade Pascal*, p. 897.

(3) 学習院年報16輯一八頁—二〇頁。

(4) 前田陽一著『モンテーニュとパスカルとの基督教弁証論』創元社。昭和二五年。

(5) 学習院年報16輯二九一—三〇頁。

(6) 人文書院『パスカル全集』三四〇頁、及び年報16輯三六頁参照。

第二節 「サシとの対話」を通じてみたパスカルとモンテーニュ

「サシとの対話 (Entretien avec M. de Sacy)」の中にはパスカルのモンテーニュ解釈が集約されていて興味ぶかい。パスカルの眼には当時モンテーニュはどのように映ったのであろうか。

パスカルは一六五四年十一月に「決定的回心」によって神の恩寵の歓喜にひたって以来、翌年一人の熱烈なジャンセニストとしてポール・ロワイヤール修道院の客分になってポール・ロワイヤール・デ・シャンにおもむき、神父のド・サシ氏がパスカルの入信をいわば確実にするための相手をする事になったいきさつは、ド・サシ氏の秘書のフォンテーヌの「ポール・ロワイヤール史資料のための覚書」に収められたこの「対話」の始めに記されている。しかしこれは「対話」とはいいながらむしろパスカルの一方的な心情の披瀝であり、ド・サシは相づちをうつ程度にとどまっている。そしてこの「対話」そのものについての真偽、あるいは実際に対話が行なわれたとして、

記録者のフォンテーヌがどれだけ忠実に記録し得たかについて以前から問題になっていることは前田陽一氏の著書

(註1)

などにもくわしい。それにしてもこの「対話」にそれ程問題が多いことについては、パスカルが、とくにモンテーニュについて語ったとされる部分において、とりちがえや、恣意的な読み込み、しかもパスカル自身の考えとモンテーニュのものとの混同があまりにも多いことが指摘される。しかし、前田氏は結局、『パンセ』のパスカル自筆の原稿と、『パンセ』のポール・ロワイヤール版と、「対話」とを、詳細に比較検討して、フォンテーヌのフィクションではないという結論を出されている。筆者もこの「対話」の内容をパスカルが実際に語ったという前提に立つ

て考察をすすめて行きたいと思う。

パスカルはド・サン氏に、自分はエピクテートスとモンテーニュをよく読んだと話し、両者の思想を対比して明快なコントラストをつくってみせる。エピクテートスは何を説いたかという点、人間は神を主目的として様々な義務を履行する能力を持っているという点であり、一方モンテーニュは、理性の弱さをあばいてみせてすべてを普遍的な懐疑 (*doute universel*) の中において、人間は無力であるから習慣あるいは自国の風習に従おうといった。

さてそこで先ずエピクテートスは人間の確実 (*certitude*) と偉大 (*grandeur*) を立証したのであるが、人間の義務 (*devoir*) を知っていたが無力 (*impuissance*) を知らないが故に傲慢 (*orgueil*) におちいった。モンテーニュとはえば、彼は人間の弱さ (*faiblesse*) を立証し、無力を知っていたが義務を知らず、人間が真の善に到達することに絶望して風習にしたがうことをすすめるので、卑怯 (*hachete*) あるいは怠惰 (*paresse*) におちいったのである。これら二人の誤りの源は人間の現在の状態が創造の時の状態と異っているのを知らなかったことにある。その結果前者は人間の最初の偉大のあとこのこっているところに注目し、その腐敗を知らないために自然を健全で修理者の必要がないものとして取り扱い、それが彼を尊大 (*dignité*) の極点にまで導いた。それに反して後者は現在のみじめさ (*misère*) を感じながら最初の尊厳を知らなかったため自然を必然的に弱く、修理しがたいものとして取り扱ったので、それが彼を真の善に到達することの絶望へ墜落させた。このように神の恩寵 (*grâce*) を受ける前の人間はどうしてもこの二つの何れかの状態にとどまってしまう。結局我々はこれら相反する二つを調和させればよいのだ。つまり人間の墮落を自覚し、無力を知った上で、絶望せずに人間が以前神の恩寵の中でくらししていた状態にもどれるよう信ずることが最も大事なことである。

以上は要するに当時パスカルの直面していた精神上の動きが、エピクテートスとモンテーニュの思想をかりて明

確に図式化されたものであり、パスカルが両者の全容を適確につかみ得たかどうかとは別問題である。それはエピクテイトスに象徴されるストア主義とモンテーニュにあらわれた懐疑主義の批判であり、グイエ(註2)の見方をかりれば、モンテーニュの懐疑それ自体が実はストア主義の理性へのかぎりなき信頼への *Antithese* であり、パスカルは両者の思想を自己の中に止揚して *Synthese* を出そうとしたのだということになる。「サシとの対話」でパスカルがモンテーニュの懐疑論者としての面を主として強調することになるのも、そしてモンテーニュの『エッセー』中の諸説とパスカル自身の考えとの区別が読んでいる者につきにくいのも、パスカルの不正確を問うことよりもむしろ、モンテーニュにことよせた自己内部の整理であるというようにみる方が妥当であろう。「サシとの対話」におけるエピクテイトスとモンテーニュの批判が来るべきキリスト教弁証論の構想を準備することになり、それがいわゆる『パンセ』という形でのこされたことはいうまでもない。

モンテーニュとパスカルの関係を以上のように考えると、『パンセ』断片六三の、「モンテーニュの中で私が読みとるすべてのものは彼のなかではなく、私自身のなかで見出しているのである」といっていることもそのまま理解出来る。

註

- (1) 前田陽一前掲書四五頁以下。
- (2) Blaise Pascal commentaires par Henri Gouhier, Librairie Philosophique, J. Vrin, 1966, p. 96.

第二章 モンテーニュにおける習慣について

第一節 『エッセー』の思想的変遷における習慣の問題

パスカルの不可知論的、懐疑的傾向の論拠になった習慣の問題は、モンテーニュからパスカルが「読みとった」ものであるのだが、モンテーニュにおいて一体習慣(註1)はどのように考えられたのであろうか。

モンテーニュが公けの生活を引いてシャトーにこもって執筆生活に入り始めたのは、一五七二年頃からであるが、一五七二年といえは、バルテルミーの大虐殺 (Massacre de Sainte Barthelemy) として史上有名な事件のおこった年で、これは宗教戦争中におこなわれた幾多の血なまぐさい出来事の中でも最も大規模で悲惨をきわめたものであった。

モンテーニュが生まれたのは一五三三年で、没年は一五九二年であるが、この時期はフランスの宗教戦争の発端から終えんまでの時期とほぼ一致する。宗教戦争はフランスにおいて市民や農民の間に拡がって行ったユグノーの勢力の増大がことのおこりであったろうが、次第に貴族間の政争という色彩が濃厚になって行き、宗教、身分、地方意識、財政、勢力関係等の問題が複雑にからみ、妥協と裏切り、陰謀と弾圧、寛容と残虐、平静と急迫が入りまじって不可解とも思われる展開を示すものであった。この時期は中世末期から近世への政治地図が大きく書き変えられ、何もかも動き出した過渡期で、モンテーニュはこのようなまさに激動のつぼの中で、新と旧の間になつて調停役として奔走したこともあった。

文化的にはフランスにおいてはイタリアに発してアルプスを越えてひろまっていたルネッサンスの最後の時期に

さしかかっており、モンテーニュには又フランスルネッサンス末期の代弁者あるいは具現者という役割もまわって来た。この時期のフランスにおいては、人々の先頭にたっていたのは、いわゆる新興ブルジョアジーが財力によって地位を買いとって貴族に成上った「法服貴族 (noblesse de robe)」であったが、モンテーニュの家がまさにそれである。Michel de Montaigne のシャトーはボルドーの近くにありますが、これはボルドーで財をなした彼の曾祖父が買いついたものである。モンテーニュ家はその後益々発展して代々ボルドー市の市長をもつとめ、『エッセー』の作者のモンテーニュも一五八一年から八五年までの四年間市長の職を二期つとめている。

さてそのような動きの中で、一五七二年に筆を執り始めてから八年目の一五八〇年にボルドーからいわゆるエッセーの始めの二巻が出され、一五八八年の第五版ではその始めの二巻に対して六〇〇の増加と新たに第三巻が加えられ、そしてこの版に対してモンテーニュは改訂増補し続けたが、彼の生存中には版を新たにすることが出来なかった。しかしこの第五版とその改訂増補の書入れ本がボルドー本 (l'Exemplaire de Bordeaux) と呼ばれて『エッセー』の基本になるのであるが、このボルドーの書入れ本の「写し」をもとにして彼の知人のピエール・ド・ブラックとマドモアゼル・グルネーとにより一五九五年に翻刻刊行されたものの、その「写し」に誤りがあることがわかり、さきのボルドー本に立ちもどって逐一検討された結果、ジェブラン、ヴィレによって一九〇六年から一九二〇年の間にボルドー本の決定版が刊行されるにいたった。今日我々の接することの出来る『エッセー』はそうした成り立ちのものであって、我々が『エッセー』に接する際にはその部分がいつ書かれたものかを考えてみなければならぬことが往々にしておこつて来るのである。

そのようなわけで『エッセー』はモンテーニュの半生の記録でもあり、およそ二十年にわたる執筆生活の中でその思想は何度かにわたる変遷をとげていて、その変遷は習慣の問題にも微妙に反映されている。

ピエール・ヴィレが、大著『^(註と)エッセーの源泉と進化』において、『エッセー』にストア主義、懷疑主義、自然主義という三つの時代を画したことはよく知られている。モンテーニュは『エッセー』の各所で、習慣のことを論じているのであるが、その主な箇所は以上の通りである。

第一巻二十三章、習慣のこと、及びみだりに国法を改めてはならぬこと

二十六章、子供の教育について

三十六章、着物を着る習慣について

四十九章、古代の習慣について

第二巻十二章、レイモン・スポンの弁護

第三巻十三章、経験について

これらのうち第二巻十二章(以下II—12というように略記する)の「レイモン・スポンの弁護」は分量も全体の約六分の一を占め、一五七六年にその一部が書き出されたことははっきりしている。これに先立って一五七五年、モンテーニュはセクストゥス・エンピリクスの『ピュロン主義概説(Hypotyposes Purrhonienes)』を読むことが直接の動機となって、それまでは潜在的に彼の中にあり、そして様々の事情によって醸成されつつあったスケプティックな傾向が急に頭をもたげ、彼の五体を支配するにいたったのである。彼は一五七六年になって、平衡の状態の天秤の絵図と、ピュロンの標語 *εὐεξα* (私は判断を中止する)とそれに日付けなどをそえて刻んだ銅メダルを製造させ、「レイモン・スポンの弁護(L'Apologie de Raimond Sebond)」の執筆にも立ち向ったのである。

更に習慣についての章のうち第三巻の十三章は一五八八年に第五版が出た際に新しくつけ加えられたことははっきりしているし、第一巻の二十六章は内容的にもそれと前後していると考えてよいが、大体一五八〇年頃書かれた

のではないかと推定されるので、結局残った一卷二十三章、三十六章、四十九章（以下Ⅰ―23、36、49と略記する）に問題がしばられて来る。ヴィレは、『^(註4)絵入りフランス文学史』のために書いた「モンテーニュ概説」の中で、『エッセー』の中で一番古く、つまり一五七二年から一五七三年の「ストア主義の時代」に書かれたのは、第一巻第三章から二十章まで、及び三十二章から四十八章まで（但し、三十九章と四〇章の一部をのぞく）、やや下って第二巻の二章から六章までであるという。そうしてみると、さきにあげた習慣についての諸章のうち、ごく初期に入れられるのは一卷の三十六章だけということになって来る。したがってⅠ―23、49だけがはっきりしていないことになるが、一五七八年に一卷の残りの数章と二巻の大部分を書いているようであるし、本稿のこれからあとの節でおおいのべるはずであるが、Ⅰ―23、49の内容からみて彼の懐疑論がクライマックスの時のものであることはいえそうで、これらはレイモン・スポンの弁護（以下「スボン」と略記する）よりむしろ後年のものではないかとさえ思う。Ⅲ―13及びⅠ―26は明らかに、「懐疑主義」を脱した晩年の「自然主義」時代に属している。

以上にみられるように、習慣の問題は『エッセー』の全時期を通じて論じられていることがわかるが、比較的その頻度が高いのは「懐疑主義の時代」といえるかもしれない。すくなくとも各時期によって内容的に少しづつ違っていることはいえる。例えばⅠ―23とⅡ―12はその「懐疑主義の時代」と深くかかわっているが、Ⅰ―49にも、短いなりにⅠ―36には出て来なかったような発想がみられるようになるのである。

Ⅰ―36^(註5)「着物を着る習慣について (De l'usage de se vestir)」。どこに攻めかかろうと思っても、わたしは何かの習慣 (la coutume) の垣を押し破らぬわけにはゆかない。それ程丹念に習慣は我等の通路のことごとくをかこってしまったている。……みな生れながらに気候の暴威を防ぐに十分な外皮を備えているように、……我々もとはそうであった。しかるに人工の光を以て太陽の光を消すものがあるように、我々も又借りたる力を以て我々に固

有なる力を減ぼしたのである。」

I—49^(註6)「古代の習慣について (Des coutumes anciennes)。わたしは我国の民衆が、自分たちの風習 (propres mœurs)、慣行 (usances) 以外には完全な模範も標準も持たないことを心から勘弁してやろうと思う。……彼等は現行の習慣の權威に、余りにも欺かれ過ぎ、くらまされすぎる。……わたしはここにわたしの記憶するさまざまな古代の習慣を並べてみようと思う。かく、人間界の事物が始終変化して極りないことを思いみたら、我々もそれについて今までよりはずっと明徹にして不動なる判断をなすようになるだろうと思うからである。」

I—36では、習慣という人工の力がもとも人間に固有のものとしてあった自然を減ぼそうとしているが、我々は生命の危険にさらされぬ程度に、すでに行き過ぎになっている習慣を排して自然を回復せねばならないといっている。自然と習慣という対立概念が、自然と人工という対立概念におきかえられ、自然は回復されねばならないといっていること及び、ここでは習慣が「着物を着る習慣」というような社会的な、客観的な意味に考えられていることがモンテーニュの「ストア時代」といわれる時期の特徴をよく表わしているかどうか。これらはそれ自体大きな問題であって一概に何ともいえない。しかし少なくともI—49では習慣はすでに人々の判断に基準を提供するものとして考えられていて、習慣が人間を欺くので、人間は相対的な判断しか出来ないことを知らねばならぬと促しているようなところはI—36には見出せないところであって、習慣はここでは個人個人の判断の中に巢食う、個人的な、主観的なものになっているのである。

註

- (1) モンテーニュにおいては習慣(慣習)は全ヘッセーを通じて *coutume* ならし *accoutumance* となっていて *habitude* という言葉は使われていない。今日では一般的に *habitude* という個人的な、主観的な *subjectif* な習慣を意味し、*coutume* という社会的な客観的な *objectif* な習慣を意味するが、モンテーニュの *coutume* は必ずしも社会的

な意味にばかり使われているわけではなく、パスカルなどでもそうであったように、モンテーニュの場合でも、この主観的な意味と客観的な意味が未だ分離していないのである。このことについては学習院大学文学部研究年報第16輯(昭和44年度)度掲載拙稿「パスカルにおける自然と習慣について」の三頁に多少立入った所見を記した。

- (2) Les sources et l'évolution des ESSAIS, 1^{re} éd. 1908 Hachette.
- (3) 関根秀雄訳『随想録』(二)四二頁参照。
- (4) Chapitre sur Montaigne dans "l'Histoire de la Littérature Française Illustrée", de Larousse.
- (5) Pléiade Essais p. 54.
- (6) *ibid.*, p. 284 f.

第二節 「レイモン・スポンの弁護」における懷疑論

『エッセー』中最もよく知られている二巻の十二章「レイモン・スポンの弁護 (Apologie de Raimond Sebond)」を先ず通読して思うことは、一体この章のどこで、このスペインの神学者の理神論を弁護しているのかということである。モンテーニュが「弁護」というからにはやはり何らかの形で「弁護」しているのであるが、一体何を弁護しようとしたのであろうかと考えこんでしまう。彼がとにかくII—12でいおうとしていることは、人間の理性の力は非常に弱く、どんな真理をも実証するだけの力はないということであり、*Que sais-je?*と問うて、せめて「判断中止」することによって、少しでもものがよくみえるようにせねばならないということであるはずであるが、ではそれでどうして理神論が「弁護」しうるのかということになって来る。そこで『エッセー』全体を流れるアイロニカルな雰囲気の中においてみて考えられることは、この場合の「弁護」も、アイロニカルな意味になっているのではないかということである。つまり、「レイモン・スポンは間違っている」と直接いわないで、理性の力

が弱いことはレイモン・スボンのあの「自然神学」がよい例であると。

ともあれ彼は一五七五年にその巾広い愛読書にセクストゥス・エンピリクスの「ピュロン主義概説」を加え、俄然そのとりこになってしまふ。初期には専らプルタルコスやセネカに傾倒してそこからもろもろの実例を借用して来るが、そこに東西古今の年代記や奇事異聞集の類いが加わり、アジアやインドの通史、その頃ヨーロッパ人の地理観念をぐっと押し広げた新大陸アメリカに関する話のききこみなどによって、自然や人間についての知識をふやして行くことは、モンテーニュの身のまわりの風俗習慣や道徳が非常に限られた相対的なものすぎないことを彼に気づかせることになって行く。そして次第に古代の懐疑主義者やアカデミー派の哲人の言も借用して来るようになり、彼の頭の中はそうして懐疑主義にぬりかえられつつあったのである。

モンテーニュはピュロンをそれまで知らなかったわけではない。『エッセー』のI—14の中に次のようなくだりがある。

「哲人^(註2)ピュロンはある大あらしの日にたまたま舟にのりあわせたが、自分の周囲のおそれさわぐ人々に向つて、その舟の中にいて、この暴風を意に介していない一頭の豚を指さして、(あの豚のようにしていなさいといつて)人々を激励した。」

(註2) この箇所をモンテーニュはディオゲネス・ラエルティオスから引用して、セクストゥス・エンピリクスから引いていないが、この時モンテーニュはこのようなピュロンの態度には批判的である。彼はいう。

「我々^(註3)がこんなにまで珍重し、そして我々が万物の霊長たる所以はそこにあるのだと尊重するこの理性という優越性(cet avantage de la raison)はひっきょう我々を苦しめるために授かったのだというのであろうか。物事の知識はこれがあるためにかえてピュロンの豚よりもかえてみじめになるのならば、物事の知識は一体何の役に

立つのか。」

この時期のモンテーニュは、だいたい苦痛や怖れなどというものは想像 (fantasie) がそうさせる場合が多いのだから、逆に別のファンタジーを持つて来て緩和させるなどしてコントロールすることが出来る。そして我々は精神 (ame) と理性をよい状態に保つことによつて肉体を苦痛から解放することが出来ると考えている。

しかるに「スボン」の中にこの豚はもう一度登場して来るのである。その時にはモンテーニュは以前とはうってかわつて豚に同情的になり、あまつさえ学問や哲学の無力ぶりをこきおろしている。そしてその箇所直前に記してある話に目をとめないわけにはいかない。

「^(註)ディオニウス・ヘラクレオテスは眼の激しい痛みにおそわれるや、とうとうかのストア学的決心を棄てざるをえなくなった。」

モンテーニュは一五七七年に初めて賢臓結石の発作におそわれて苦しみ、以後たびたびこの発作になやまされたというが、その時には大いにディオニウス・ヘラクレオテスに共感したことであろう。

しかしその一五七七年という時期は、セクストゥス・エンピリクスの『ピュロン主義概説』を読み始めた時期よりも少しあとになるが、一五七五年に先立つ一五七四年のモンテーニュの公けの生活を年譜などで追ってみると、ポワトール近辺の国王軍とポルドー最高法院との連絡にあたり、カトリックの立場にたつて、ポルドール近辺のプロテスタントの動きを警戒すべきことを演説するというように、宗教戦争の渦中で動きまわっている。彼はカトリックに基礎をおきつつもユグノーの総帥アンリ・ド・ナヴァールと互いに目おき合っていたこともよく知られている。一五八〇年以後は新旧の間に立つ調停行為が目立つようになるかと思ふと、大分あとのことであるが、旧教側にとらえられてパスチーユに投げこまれるはめにもなる。ルネッサンスの時代はヨーロッパの社会にかつてな

った混乱を巻き起こしたが、モンテーニュが当時の複雑きわまりない、不可解な動きの中でたった一つの寄りどころとして守りぬこうとしたものは真実を見究める眼をもつ自己であった。そのようなときセクストゥス・エンピリクスに接したことは決定的であつただろう。彼には己れを無にして一切の判断を中止する、^(註5)「自分はじつとして動かず」というビュロニズムの立場をとることこそ彼の当時の心境に最もふさわしかったにちがいない。彼はいう。

「人間の妄想が生み出したあれほどの誤謬の中にはまり込んでいるより、むしろ中ぶらりんでいる方がましではあるまいか。その所信を懸案にしておくほうが、あの二手にわかれて反乱とけんかを専らにする仲間に入るよりもましではあるまいか。」

宗教戦争の戦乱につぐ戦乱の混沌の中で、モンテーニュはビュロン流のエポケーを以って武装したのである。だが、彼がエポケーを楯として立ち向つた相手はそればかりではない。我々は先ず「スポン」のかなり始めのところからしばらくのあいだ続く、主としてブルタルコスから引用しているおびただしい数の動物の話の意味を考えてみなければならぬ。彼はそれらの動物の話の中で結局人間を動物の地位にまで、あるいはそれ以下にひき下ろすのにやっきになっているかのごとくである。一体何故モンテーニュはこんなにまで人間をおとしめたのであろうか、首をかき上げてしまわざるを得ない。そして他方で「スポン」では天体の動きが前後して話題になっていることにも気付く。考えてみれば動物と人間を同列におこうとしていることと宇宙論とは無関係ではないのである。モンテーニュは人間の能力の過大評価をさけて、中世の宇宙像のように、すべてのものの中心に人間をおこうとすることをやめて、人間を全宇宙の中で偶然的な存在として、普通の動物と同様、自然の中にほり出ししてみようとしたのではないかということに思いいたる。

一五四三年にはコペルニクスの『天体の回転について』が出て、永い間、人々の意識習慣になっていた「天動説」の転覆を迫った。もっともその著書の出版当時は、彼の真の意図が表に出ないような形で出され、一五八四年になつて(註6)ジョルダン・ブルーノがその著書の中でコペルニクスを公然と弁護したが、ブルーノも異端審問の不運な犠牲者となることをまぬかれなかった。ブルーノのように熱狂すれば火刑にされる状態であつたし、多くの人はただ旧来の宇宙像にしがみついていただけであり、八〇年近く後の(註7)パスカルでさえどうやら天動説を棄てがたく、地動説をたんに一つの仮説とみなす程度で、パスカル当時でそれが大方の反応だったのである。

ではモンテーニュはコペルニクスとはどう対決したのであろうか。「スポン」のかなり終りに近いところこの問題について次のようにいっている。

「天と星とは三千年の間動いていた。すべての人はそう信じて来たが、とうとうサモスのクレアンテスだか、テオフラストゥスに従えばシラクサのニケタスだか、むしろ地球の方が、その軸を中心とし、黄道帯の斜めなる円周に従つて動くのである、という説を思いつくにいたつた。そして今日ではコペルニクスが、極めてよくこの学説を基礎づけ、それを甚だ規則正しくすべての星学上の結論の上に用いている。こうしたことから我等は何を学ぶべきか。『我々は二つの内のいづれかということにはかり気をとられてはならないぞ』ということではなければならぬ。いや今より千年の後、第三の説が現れ出て以上の二説を二つながらくつがえすことがないとはどうしていえよう(傍点筆者)」。

このようなまさに天と地がひっくり返るような科学思想史上の出来事にも直面することになったモンテーニュは、そのことに促がされて、従来の天動説とも地動説とも判断を下さないで「エポケー」の括弧の中に入れてしまおうとする。しかも又逆にこのコペルニクス説との対決によつてますます「エポケー」の態度をかためようとして

いる。

ただししかし、さきの引用にみるかぎり、コペルニクスの説を正しいとはいわず、一つの仮説として相対的に考えようとしているけれども、少くともその説を否定はしていない。むしろ控え目ながらコペルニクスの業績を称えようとさえしているように受けとれる。かのガリレイが裁判にかけられて、真理かしからずんば死かの窮地に追い込まれたのが一六三三年のことで、モンテーニュが「レイモン・スポンの弁護」を書いていたのはそれよりざっと六〇年近く以前になることを考えるとモンテーニュのその叙述はかなり思い切ったものであるともいえるのであって、ピュロンの影響を受けているとはいえ、モンテーニュの「エポケー」はピュロンのそれのようにスタティックなものではなく、かなりダイナミックな雰囲気のものであるように思われる。

しかし、ピュロンにしてもモンテーニュにしても、理論面ではエポケーし続けることが出来ても生活の面ではそうも行かなくなつた。モンテーニュは云う。ピュロンは「自然的傾向、情念の衝動と拘束、法律及び習慣の組織、学芸上の伝統に順応する。」^(註10) またモンテーニュ自身は、「このように自分の動搖性を認識したことから、はからずもわたしは、自分の中にある意見の不変性を産み出すようなことになつた。自分の最初の、もち前の、意見をほとんど変えないようになった。まったく、革新説の中にはどんなまことらしきがあるにしても、わたしは容易に変えないのである。取りかえて損をするのもつまらないから。それにわたしには選択をするだけの能力もないから、他人の選択に従い、神から与えられた状態の内にかんばるのである。そうでもしなければ、到底わたしは、絶えずところがることを免れないであろう。かくてわたしは恩寵(Grace)のおかげで、我々の世紀が産み出したかほどに沢山の分派支派の中にありながら、少しも心をかき乱されることなく、ひたすら我がキリスト教古来の言動に頼りつづけている」^(註11) ことになり、又、「我々の行為(mœurs)の規則自身から引き出すと我々は大変な混乱の中に投げ出さ

れる。この点について我々の理性がもっともらしく我々に命ずるのは一般に各自その国の掟に従うべしということである」ということになって、ピュロンもモンテーニュも共に現状維持というところに落着く。もっともモンテーニュの場合は特に晩年は現状維持にとどまらないのであるが。見方をかえれば、ピュロンにせよ、モンテーニュにせよ、習慣(慣習)なり、つまりは既成の仕組みはエポケーの括弧の中に入りきらずに外に出てしまうのである。

但しこの場合の習慣は社会的な客観的な *objectif* な意味のものであるから、慣習と訳すべきかもしれないが、モンテーニュにおいてはパスカル同様、あるいは一般に十七世紀頃迄は今日の我々の通念になっている、個人的な、主観的な (*subjectif*) 意味の *habitude* と、社会的な客観的な *coutume* (*accoutumance*) の区別がついておらず、一律に *coutume* という表現をとっていて、それが場合によって *habitude* の意味になることもあるのである。だが「スボン」では習慣は殆んど客観的な意味に使われているようで、パスカルがブランシュヴィック版の『パンセ』^(註1)の第五章で我々の社会生活を秩序づける「正義」の本質を分析した際にはその発想をそっくりモンテーニュから借用した。パスカルはしかし法律等のいわゆる「社会的正義」なるものの根源が実はあいまいな偶然的なもので、習慣の力によって「正義」になって行くプロセスをモンテーニュよりずっとはっきり示したことはなるにしても、「スボン」の文章が場合によってはそのまま『パンセ』の断章に対応していることもある。

「なにが善行だろう。昨日まであんなに重んじられたけれど、明日はもう捨てて顧みられなくなるようなものが。なにが真理だろう。これらの山々の此方にのみ限られていて、それを越えてはたちまち虚偽に変ずるようなものが。……法律をその根源にさかのぼって論ずることは危険である。それは河の如く流れている間に大きくなる。」

——『パンセ』断片二九四と対応。

「真に我等のものは何一つ存せず、余が我等のものと呼びなすは人為の所産にすぎず(キケロ)。——『パンセ』^(註1)

断片九二と対応。

註

- (1) Pléiade Essais, p. 54.
- (2) Montaigne Essais, commentaire tome premier par Maurice Rat, Classique Garnier, 1962, p. 688.
- (3) Pléiade Essais, p. 54.
- (4) *ibid.*, p. 470.
- (5) *ibid.*, p. 485.
- (6) タケジキ文庫『ルネッサンスの哲学』、ヘーレーヌ・ヴェドリーヌ著、高敏他訳、白水社、昭和四七年、二五頁以下参照。
- (7) 『パスカル冥想録』由木康訳、白水社、昭和四二年、一二二頁「二二八」の註。
- (8) Pléiade Essais, p. 553.
- (9) Montaigne, sa vie, son oeuvre par André Cresson, Presses Universitaires de France, 1961, p. 51.
- (10) Pléiade Essais, p. 485.
- (11) *ibid.*, p. 553.
- (12) *ibid.*, p. 562.
- (13) 学習院大学文学部研究年報第16輯(昭和44年度)拙稿「パスカルにおける自然と習慣について」一〇頁参照。
- (14) Pléiade Essais, p. 563.
- (15) *ibid.*, p. 565; Notes et variantes, p. 1576. ≪Rien ne reste qui soit vraiment nôtre; ce que j'appelle nôtre est production de l'art. ≫ Cicéron, De finibus, V, xxxi.
モンテーニュは自然と人為(人工)の習慣等について、このようにキケロから引用していることが多い。したがって、モンテーニュ經由でキケロの考え方がパスカルにも入っていることになる。

第三節 「直実の姿をかくす」習慣

パスカルの認識論上の不可知論が最も尖鋭になるのは、「自然は第一の習慣である」というところであり、この

命題の裏には習慣が理性や感情を欺くということがあった。パスカルはその懐疑的な部分を「スボン」から借りて来ているというならば、そのような命題乃至その意味をも「スボン」から借用しているのであろうか。否、「スボン」ではまだ認識の起源のところに習慣があつて理性や感情を欺くというような考え方はかたまっていないのである。むしろこのような考え方をまとめたのはパスカルである。ではモンテーニュはそのことについては何もいっていないのかというところでもない。パスカルのヒントになった筈のことをたしかに知っているのである。だがそれは「スボン」ではなくてI—23、49の各章においてである。ただ「スボン」のおわりの方で感覚について次のように述べている点は注目すべきである。

モンテーニュはエピクルスやプラトンが認識や判断において感覚の働きを重視したのに刺激されて感覚について考えるようになったといい、そして「^(註)感覚こそは人間の認識の始めであり、終りである」と考える。彼は先ず、人間の感覚と、プルタルコス^(註)の提供する資料にもとづいた動物のそれとを比較してみ、人間には動物が持っているような感覚のうちいくつかあるいは多数のものが欠落して、それがために物事のかたちの大部分が人間にはかくされているのではなからうか。自然を適確につかみ得ないのもそこに原因があるのではないかと考えるにいたる。すべての認識が諸感覚の仲介によって我々のうちに生れるのなら、諸感覚が誤まった報告をすれば我々の心(ハ心象? V ame)のうちに流れ込む光は暗いものになる。感覚は非常に不確実で誤りにおちいりやすいのに、感覚は我々の理性や心を支配する力をもっており、諸感覚が我々の悟性(Entendement)に与えるその同じ欺まん(piperie)を感覚はやがて自分も蒙る。我々の心はときどきそうして感覚に復しゅうし、両者はあらそつてうそをついたり(mentir)たがいにあざむきあう(se tromper)。

このように「スボン」では人間の感覚それ自体が欠陥をもっていて、理性や心(象)をあざむくとしていて、そ

の感覚のもつ欺まん性に習慣という要素がからんで来るというようにはまだ(?) 考えてはいない。習慣と感覚や理性とのかわり合いが出て来るのは I—23、49 においてである。そして習慣が欺く力 (puissances trompeuses) だということをはっきりさせたのはパスカルであった。「スボン」では tromper するのは感覚だったのである。パスカルはモンテーニュが人間の理性の無力を説明するためにあれだけたくさん提供した動物の比喩には関心(註5)を示さず、習慣の力の方に集中的にスポットライトをあてているのである。

tromper といえは、I—49 にもそのシノニムが出て来る。しかもそこでモンテーニュは、習慣が我々を欺くことを力をこめて語る。

「我々は現行の習慣の權威に余りにも欺かれすぎ、くろまされすぎむ (se laisser si fort piper et aveugler)。」
 そして I—23 で、認識作用に習慣が加わって来て、決定的な力となることははっきりして来る。

「いかに習慣が我々の感覚を鈍らすか (hebetar)。」

「習慣は我々の心に奇異な印象を刻みつける。」

「習慣は事毎に自然の法則を曲げ強いる。」

「習慣は我々に物事の真実の姿をかくす。」

このように I—23 で始めて、モンテーニュの懐疑論の理論的な面が、習慣との関係で認識論的にもシャープになって来るといえると思うが、I—23 の次の部分はパスカルの懐疑的傾向を表現する断章のうちの中核をなすものとの関係で重要であると思われる。

「良心(註6)の命令は自然から出るものといわれるけれども習慣から生れる。……本当に我々は母親の乳と共に、あらゆる習慣のみこむのであるから、そして世界のすがたは習慣という状態において我々の最初の視覚に映るのであ

るから、いわば我々はこのような歩みに従うという条件で生れたもののようにである。そして現に我々の周囲で信用を博しているところの、且つ我々の父達のたねによって我々の精神の内に浸みこんでいるところのあの共通の思想がさも一般的自然的思想であるように思われる（傍点筆者）。

I—23の全文のうちあるいは大きく『エッセー』全体を通じて人間と自然との関係あるいは人間の自然認識の能力を語ってこれ程鋭いところはあるまい。人間は生れおちるとから完全な認識能力をもっているわけではない。始めは育てるものとの触覚、与えられるものの嗅覚、味覚などから出発する筈であって、同じことのくり返しの中に様子もつかめ、他の感覚の能力も加わって行く。このところでモンテーニュにおいて習慣は主観的な様相をおびて来るのであるが、もとよりモンテーニュ自身はそのことをはっきり意識していたわけではない。

そしてモンテーニュはさきの引用箇所少し前に、「我々の主要な教育は乳母の手中にある」ともいっている。そのことは要するに、自然は人間には始めから習慣の集積として以外には与えられようがないのだということである。このことを論理的にスマートに表現すると、パスカルの断片九三「習慣が第二の自然であるように、この自然それ自身も第一の習慣であるにすぎないのではないか」ということにもなっているのではあるまいか。パスカルはモンテーニュが克明に記している人間についての資料を駆使してたくみに一つの見方をまとめあげてしまうことしばしばであるが、習慣についても、モンテーニュが『エッセー』の各章で記していることの要所要所をとらえて見事にまとまりをつけているのである。だが、表現力はパスカル程冴えないが、モンテーニュの方に具体性があり、説得力があるような気がする。しかも、このI—23の今問題にしている引用箇所にはパスカルの断片九三に感じられるような切羽詰った雰囲気はない。パスカルは習慣に支配された人間のあり方を否定し、恩寵を得ることによって克服しようとする。もっとも信仰を得た時点で改めて習慣のもつ「自動性」によって信仰をかためようとするこ

となるけれども。モンテーニュの場合には人間の弱さをそのまま肯定してよく見究めた上で、現状をそのまま受入れて先ず、現状維持の態勢でのぞむことになる。先ず、といったのは晩年に近づくにつれ、そのような現状維持に止まらず、習慣の力を教育的に利用して自らを積極的に変革しようとするからである。

註

(1) *Pleiade Essais*, pp. 571 f.

(2) パスカルはいくつかの断片で、動物は本能 (*instinct*) で動き、人間は考える輩で理性をそなえている、というように、本能と理性を対比し、動物には意志がなく、精神がなく、何よりも考える力がない点で、人間とはことなることを強調する。

「Penser することが人間を偉大にする。」このようなところはデカルトに共感している。(第六編思考の尊厳、断片、三三九—三四八)。

(3) 本稿第二章、第一節参照。

(4) *Pleiade Essais*, p. 106 f.

(5) *ibid.*, p. 114.

あとがき

結局この小論では主としてモンテーニュの「レイモン・スボンの弁護」とその前後の章を中心にしたために晩年の自然主義的、経験主義的な時期を反映した習慣論をはしめることになってしまったが、又機会を別にしてモンテーニュのこの時期のものにとりくんでみたいと思う。その上で改めてこの試論の結論をまとめてみようと思う。